

編集後記

次世代医療構想センター（以下、当センター）からの研究活動に関する報告は、報告会「千葉医療構想フォーラム」での口頭発表と「活動報告書」にて行ってきました。毎年開催する予定であった報告会は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による延期を経て、2022年1月15日に2回目の報告会「千葉医療構想フォーラム」を開催しました。そこで千葉県に対して、地域医療構想の実現のための提言を示し、諸活動について報告をしました。当報告書には2019年の設立当初からの活動内容を記載しており、当報告書は寄附講座としての当センターの集大成となります。

当報告書の目玉である、「千葉県地域医療構想の実現のための提言」を作成するにあたっては、地域医療構想が進まない原因を考察し、医療資源が限られている中で現実的な解として導き出しました。吉村健佑が当センター長として主導し、地域医療構想や医師の働き方改革などへの慎重な意見もある中、現場の医療従事者からの変革への期待を背負い、当センターのメンバーと議論を重ねて、現時点でたどり着いた結論です。

今回示した提言は、地域の医療を、質が高く持続可能なものにするための現実的な対策です。日本全国での地域医療構想の推進において、一助となることを切に願っています。

当センターが2019年8月に設立されてから2022年3月まで、2年8か月の期間、答えの見えない課題に向き合いながら、センターメンバー一同、走り抜けてきました。編者である成瀬浩史 特任助教はセンターメンバーの中で設立当初から常勤の特任教員として勤務し、寄附講座としての当センターの始まりから終わりまでをつぶさに見て参りましたが、この一連の活動を報告書としてまとめられることを感慨深く思います。

持続可能で、質の高い医療を実現することをミッションとする当センターの研究活動の内容や合意形成の方法などは、硬直化しがちな地域医療政策に変革をもたらすうえで、他に例のない重要な知見となったと思います。そのような重要な研究活動の一員に加えてくださった吉村健佑センター長に感謝を申し上げます。

吉村センター長の危機に瀕した医療をどうにかしたいという情熱にひかれ、数多くのメンバーが集い、答えの見えない難題に対して、勇猛果敢に挑戦して参りました。佐藤大介副センター長、堀井聡子特任准教授、阿部幸喜特任講師は、科学研究費助成事業やCCDプロジェクト（ノボノルディスクファーマとの共同研究）など多岐にわたる研究事業で、豊富な経験に裏打ちされた質の高い研究活動がなされ、千葉県内にとどまらず、日本全国や世界も視野に入れて研究活動を行って参りました。当センターの柱として、リーダーシップを発揮していただきました。齋藤大輝、富永尚宏、廣澤聡子、岡田玲緒奈 各特任助教、塙真輔客員研究員は、救急、周産期、小児の各診療科の現場を知る医師として、各診療科の提言をまとめ、アドバイザーとしても調査事業の質の向上に貢献して参りました。緒方健特任研究員は株式会社NTTコミュニケーションズとの共同研究を通して、希少疾患・難治性疾患の治療や薬剤耐性菌対策としてのより安全な多施設連携の技術開発に貢献しています。これらの活動を、縁の下での力持ちとして、技術補佐員の森田美紀、梁晴茵、事務補佐員の奥島佳代子、加藤那智、鳥原佑生客員研究員は粘り強く支えてくださいました。また、小林大介客員准教授、梅澤耕学、小林真史、齋藤博樹、各客員研究員には当センターの研究活動において、各所でご助言くださいました。過去に在籍された、櫻庭唱子氏、奥村泰之氏、高橋希氏、岩瀬信哉氏、窪田和巳氏、その他関係各所の皆様にも多くのお力添えをいただきました。

これらのメンバーと活動を共にし、成果をご報告できたのは、千葉県健康福祉政策課 地域医療構想推進室の皆様、千葉県の地域医療構想に関する研究の機会をいただいたことによるものです。

全ての皆様に心より御礼申し上げます。

2022年3月吉日



なるせひろし
成瀬 浩史

国立大学法人千葉大学
医学部附属病院
次世代医療構想センター
特任助教